

AI・ロボット 転機予報 Part2 ③

方で、ビジネスとは異規性)や、正しく実験性が高くするため、新である。新規性が少ないよりチャレンジングな新たなタスクが生まれ、厳密かつ再現性のてくる。

2つのパターン

乱暴な分類になつて

要件が多少荒削りでも

ビジネス応用において

応用時の問題点

一方パターン2の論

成熟度を見極めなが

アカデミア研究者の
主な仕事は良い論文を
書くことだが、特に数
が重視される。論文
は、査読(研究者同士
が互いの論文をチェッ
クし合う仕組み)で判
断されるため、他の研
究者を説得できる論文
であるかが重要にな
る。論文の審査基準も
端的技術知見をタイム
リーに取り込んでいく
ことは重要である。一
ことがない内容か(新

乱暴な分類になつて
しまつが、研究者が論
文を通すための戦略の
第1パターンは、新規
効性に比重を置くこと

要件が多少荒削りでも
許されやすい。第2の
私見ではあるが、研
究分野も典型的にはこ
の二つのパターンの繰
り返して発展してい

ビジネス応用において
のどちらか一方に過度
に深入りしないことが
重要である。パターン

一方パターン2の論
文は、有効性が高く素
晴らしい手法のように
見え、つい「精度が上
がるのではないか？」
と期待してしまう。し
かし、査読をパスする
も、ディープラーニン
グ(深層学習)の世界
では、それが数カ月の
スパンで起こり得る。

要素技術「枯れた」ものを採用

Laboro.AI
代表取締役CTO

藤原 弘将



07年(平19)産業技術総合研
究所入所。12年ボストン・コ
ンサルティング・グループ入
社。AI系
のスタート
アップ企業
を経て、16
年にLaboro.AI
を創業。

り返して発展してい
く。まず新しいタスク
が提案され、そのタス
クが他の研究者の興味
を引き、多数の研究者
が参入し、精度を上げ
るための数々の工夫が
論文となる。次第に精
度が成熟してくると、
とも「やってみた」研

1のような新タスクを
提案する論文は耳目を
集めやすく、「これで
課題が解決できるので
は？」と見がちであ
らないということにな
りがちである。
集合知を信頼
持つべき視点として
(金曜日に掲載)

アカデミアの世界を理解する